



『安嘉門院四条五百首』における「家の意識」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 紗代子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005073">https://doi.org/10.24729/00005073</a>

## 『安嘉門院四條五百首』における「家の意識」について

佐々木 紗代子

### はじめに

中世の女流歌人、安嘉門院四條（以下、作者名は文学史で一般的に使用される「阿仏」で統一する）作『安嘉門院四條五百首』（以下『安嘉五百首』と略称する）は、藤原為氏との細川庄をめぐる訴訟のため、鎌倉に下った作者が、その勝訴を祈願して、弘安三年（一二八〇）から四年（一二八二）にかけて「今熊野・えがら・新賀茂・新日吉・鹿嶋」の五つの社に、各百首を奉納したものである。『安嘉五百首』の現存伝本は三本あり、いずれも異同は少なく同一祖本に発するものとされる。内容は「和歌本文」と、その前後に置かれた短い「序文」「跋文」で構成されている。歌題が一首ずつに付され、この題は「堀河百首題」で詠まれていることが知られる。

『安嘉五百首』の作者阿仏は、藤原為家（一一九八—一二七五）

『安嘉門院四條五百首』における「家の意識」について

の晩年の妻で、為相（一二六三—一三二八）の母である。没年は弘安六年（一二八三）頃、六〇歳前後と推定されている。時期は不明であるが、おそらくは少女期より安嘉門院（一二〇九—一二八三）に仕え、越前・右衛門佐・四條と呼ばれた。出家名が阿仏、後には嵯峨禪尼と呼称されている。和歌での経歴として、歌合詠では、弘長三年（一二六三）三月の為家の勸進による「住吉社歌合」や「玉津島歌合」、建治元年（一二七五）九月（同年五月に為家は没）に出詠した『摂政家月十首歌合』、同時期の開催と推定されている『十七番詩歌合』などがあり、さらには『宗尊親王三百首』の点者、「弘安百首」の詠者でもある。現存和歌作品の総数はおよそ九一〇首あり、そのうち、勅撰集入集歌は四八首である。為家の周辺で和歌活動を行った人であろうと考えられている。

右に述べたように、『安嘉五百首』は複数社への奉納百首で

あり、かつ「堀河百首題」で作歌された作品である。これと形式を同じくする先行例は、一つは藤原俊成が『千載和歌集』奉覽後まもない頃の文治六年（一一九〇）三月から約一年の間に、五社に奉納した『五社百首』<sup>(8)</sup>（以下「俊成五社百首」と称する）であり、いま一つは藤原為家が『統古今集』の撰者拜命を機に、文応二年（一二六一）正月から約一年半の間に、七社に奉納した『七社百首』<sup>(9)</sup>（以下「為家七社百首」と称する）の二作品である。同じ奉納百首でも『安嘉五百首』は、『俊成五社百首』『為家七社百首』よりも私的な要素の強い百首歌であり、詠まれた経緯や、作者の技量においても大きく異っている。<sup>(10)</sup>しかし、阿仏にとつて、これらの先行作品は欠くべからざる存在であり、作品の撰取・享受ということでは関係が深いと考えられる。本稿では、『安嘉五百首』に影響を与えた俊成・定家及び為家の詠歌を検討し、その意味するところを考えてみたい。

一

先ず、『俊成五社百首』からの影響歌を挙げてみよう。（以下、本文の傍線・傍点などは私に付したものである。また『安嘉五百首』と関連の深い和歌本文は一字下げにしている）

① 思ひしるまぼろしのよの昔のみ猶恋しきぞいやはかななる

（安嘉五百首・今熊野・懐旧・一〇二）  
むかしだに昔とおもひしたらちねの猶恋しきぞはかなかりける

（俊成五社百首・日吉・懐旧・四九六、新古今・一八一五）  
阿仏歌は、現実には夢幻の世の如くはかないものと思ひ知つたことよ、昔ばかりがいよいよ恋しい、と老境を迎えたであろう自身の感慨を詠んだ一首である。俊成歌とは、下句がほぼ一致しており、同じように昔（俊成歌では親のこと）を恋しいと詠む歌である。結句の「はかなかりける」を「いやはかななる」としている点については、次に挙げた定家・為家も詠んでおり、新古今時代以降の好尚に適う形のものに変えた可能性が考えられる。また自分に身近な人の詠を自歌に取り入れた例として考えてもよいだろう。なお両首とも同じ「懐旧」題である点も注意される。

風さわぐ荻の葉よくとうきてみし夢のただぢぞいやはかななる  
（拾遺愚草・二三六〇・定家）  
うたたねの夢のただぢを恨みてもさむるうつつぞいやはかななる  
（為家集・一〇四七）  
② 春たちてなぬかの浦の磯菜をや若菜になしてあさはつむらふ  
（安嘉五百首・鹿嶋・若菜・四一一）

けふとてや磯菜つむらん伊勢島やいちしの浦の海士の乙  
女子 (俊成五杜百首・伊勢・若菜・五、新古今・一六二二)

俊成歌の「けふとてや」(若菜の節日を示す)を受けて、阿仏歌は、立春を迎えてなぬかの浦の磯菜を若菜になぞらえ、今朝には摘んでいることであろうか、と詠んでいる。「なぬか」の若菜については、『堀河百首』には、「春たちてけふはなぬかにかすがののわかかなはまだぞふた葉なりける」(若菜・七八・肥後)と、「なぬか」を詠み入れる歌があり、『八雲御抄』には、若菜について「春、子日、また七日の物也」(巻三・草部)と記されている。阿仏は、俊成歌の伊勢国の歌枕「いちしの浦」を、「七日」という名を持つ「なぬかの浦」に詠みかえ、立春から「なぬか」と「なぬかの浦」の掛詞としたものと考えられる。これは鹿嶋社詠なので常陸国の歌枕と思われるが、場所は不明である。

①②の阿仏歌の本歌とみなされる俊成歌は、同時に新古今入集歌でもある。阿仏がどちらの作品を参考にしたのか、断定的なことは言えず、『新古今集』からの可能性も考えられるが、阿仏歌が『俊成五杜百首』と同題の「懐旧」「若菜」詠であることから、こちらからの影響を考える方が蓋然性が高いのではないだろうか。

ちなみに『俊成五杜百首』から『新古今集』への入集歌は九

『安嘉門院四条五百首』における「家の意識」について

首である。今ここにあげた二首以外には、阿仏が直接に影響を受けたと思しき歌は見出せないことから、やはり『俊成五杜百首』の影響と捉える方が妥当ではないかと思うのである。

③ 薺みがくはすのうき葉の白玉に光をそへて花咲きにけり

(安嘉五百首・えがら・迦・二三八)

野辺におくおなじ薺ともみえぬかなはすのうき葉にやど  
る白玉 (俊成五杜百首・賀茂・迦・二二二)

この二首はともに「蓮」題の歌である。阿仏歌は、蓮のうき葉の露は白玉のように輝いて見える、加えてなお光を添えることとく花を咲かせているよ、とたった今花が咲いたのだというのである。蓮花を和歌に詠み入れる場合、「はちす葉は妙なる法の花」(堀河百首・迦・五〇六・藤原頼仲)のように仏教色を念頭に置く例や、芳香を詠んだり、また、女性に見立てる例は見られるが、花そのものをめぐる歌は数少ない。阿仏歌は咲いた蓮の花を純粹に称える叙景歌となっている。

第二句「はすのうき葉」は、次の『堀河百首』国信詠が初出と推定される歌語であり、院政期に発する新しい表現の一つともされる。

水はしるはすのうき葉のしづまずてうらやましくも生ひの  
ぼるかな (蓮・四九九)

また、次に挙げるように、源俊賴も詠んでおり、『金葉集』に自ら入集させた自信作である。

風ふけばはすのうき葉に玉こえてすずしくなりぬひぐらし  
の声 (金葉一・夏・一四五、金葉初・夏・二二二)

この歌は「俊賴和歌における叙景歌のひとつの到達点」とも評される歌である。この俊賴歌に想を得て、俊成は「蓮」題で「はすのうき葉にやどる白玉」と詠んだだろう。また、阿仏歌第四句「光をそへて」は、用例はそれほど多くはなく、俊成詠の「夕月夜光をそへて」(正治初度百首・夏・一一二五)などの例が見られる。阿仏はこれらの歌を参考に、蓮の葉にかがやく白玉を詠み、美しく咲いた蓮花をめぐる叙景歌の詠み方も模索していることになる。

④ あくるまで猶きえのこる蚊遣火の煙さびしき里の一むら

(安嘉五百首・今熊野・蚊遣火・三七)  
あはれさを人みよとてもたてざらん煙さびしき賤が蚊遣  
火 (俊成五社百首・賀茂・蚊遣火・二三)

夜が明けるまでも猶消え残っている、里のひとすじの蚊遣火はやはり寂しいものだよ、と詠んでいる。夏の風物詩である蚊遣火の煙は「宿にふすぶる」(古今・恋一・五〇〇・よみ人しらす)や、「したにのみくゆる思ひ」(相模集・三四九)のように詠まれ

ることが多く、「煙さびしき」と詠むものは、俊成と阿仏のみでは見当たらない。俊成歌が「あはれさ」を詠むのと同様に、あくる日までも猶消え残っている煙に「さびしさ」を感じ、阿仏は詠んでいるだろう。

その他、『俊成五社百首』と直接関連づけられる影響歌として次の二首を挙げておこう。⑤歌は、同題「竹」であり、三句がほぼ一致する類似表現である。⑥歌の「かれの尾花」は、『俊成五社百首』以後、阿仏と同時代の『雅有集』(寒草箱・二九)や、後代の『嘉元百首』(雪・一一五二・実教)にしか例が見出せないものである。

⑤ さりともや流れ久しき河竹のよよにかはらぬ末をたのめば

(安嘉五百首・えがら・竹・一八九)  
もしきや流れ久しき河竹の千世のみどりは君ぞみるべ  
き (俊成五社百首・日吉・竹・四八三)

⑥ かへれとや都をいでてこしみちのかれのの尾花われまねく

らん (安嘉五百首・鹿嶋・野・四九四)  
霜さゆるかれのの尾花あはれなりその姿までしをり過ぎ  
けん (俊成五社百首・日吉・霜・四五八)

次いで、『俊成五社百首』詠が直接阿仏ではなく、『為家七社百首』詠を通して阿仏に影響を及ぼしていると思われる例を挙

げる。

⑦ 湊るる鴈のうきすのうき浪なみによるかたなきや我身なるらん

(安嘉五百首・新日吉・水鳥・三七〇)

さざ波や鴈のうきすのうきながら祈る昔の跡な忘れそ

(為家七社百首・日吉・水鳥・四四七)

冬の池の蘆のかれ葉の乱れこそ鴈のうきすのたよりなり

けれ  
(俊成五社百首・賀茂・寒蘆・一六一)

阿仏歌の「湊るる鴈」という表現は珍しい。鴈鳥は『万葉集』

に「ほ鳥の潜く池水」(巻四・七二五・大伴坂上郎女)と見え、『古

今集』に「冬の池に住む鴈鳥の」(恋三・六六二・躬恒)と詠まれ

て以来、多く「池が氷った状態でのほ鳥の習性」とからめて歌

われる『歌ことば歌枕大辞典』のが、一般的な詠み方とされる。

阿仏は鎌倉に向かう途中の近江のみなどの実景を思い浮かべて

この歌を詠んだのであろうか。

第二句「鴈のうきす」は、勅撰集では南北朝時代の『新千載

集』(恋三・一四〇・尊道法親王、他二首)まで見られない歌語で

あるが、初見は次の一首(嘉応二年(一一七〇)建春門院北面歌合

である。また、俊成詠の「鴈のうきす」も比較的早い時代のも

のである。

子を思ふ鴈のうきすのゆられきて捨てじとすれやみがくれ

もせぬ

(水鳥近馴・五番右勝・頼政)

この歌合詠の「鴈のうきす」については、『袖中抄』に「ほの

浮すとは鴈と云鳥のす也。此鳥のすは波のうへに作おきてあだ

なれば、波のひくにしたがひてゆられありくといふ人もあり。

されば頼政卿もにほのうきすのゆられきてと詠り」(第十三・に

ほのうきす)と見え、水(世)の流れにまかせて、たよりない、

よるべない状態によく用いられている。たとえば、『正治初度

百首』「鳥」題の女流歌人の詠二首を挙げてみよう。

はかなしや風にただよふ波のうへに鴈のうきすのさてもよ

をふる  
(二九七・式子内親王)

おのづからたちよるかたもなきなる鴈のうきすのうきみ

なりけり  
(一九九五・二条院讃岐)

二首ともに、「はかなしや」や「たちよるかたもなき」を詠

み入れており、⑦の阿仏歌も同様であろう。また、二条院讃岐

歌の、「たちよるかたもなきさ」(「たちよるかたもなき」と「なき

さ」の掛詞)が、阿仏歌第四句「よるかた(方・湯)なきや」と

近く、この歌も参考にしているかも知れない。阿仏は、頼りと

する人のいない(夫が亡くなった)わが身に置きかえて、自己の

心情を詠んだものと思われる。阿仏歌は為家歌とは上句が似か

よっており、それぞれ「新日吉社」「日吉社」への奉納歌で、同

じ「水鳥」題であることと併せて、阿仏が為家歌をとつたものと思われる。また俊成歌も題は違うが、奉納歌で詠んでいることもあり、為家歌に影響を与えた一首と考えられる。

⑧ 沈む身を誰ひくべしと頼みてかうきぬのあやめ下<sub>つ</sub>に待つらん  
(安嘉五百首・えがら・昌蒲<sub>つ</sub>・一三二)

人しれぬねはしげれども奥山のうきぬのあやめ誰かひくべき  
(為家七社百首・伊勢・菖蒲・一六九)

奥山の谷のうきぬのあやめ草引く人なしにねやなかるらん  
(俊成五社百首・伊勢・菖蒲・二五)

阿仏歌は、今にも沈みそうなよるべない身の上の私を、誰が引いてくれるであろう、と水にただようあやめによせて、下(心のなか)で待っています、と詠んでいる。直接の影響歌は、結句を「誰かひくべき」と詠む為家詠が近く、この歌に応答して阿仏は詠んでいるかのごとくである。俊成、為家、阿仏三首に共通する「うきぬ」は、早く『万葉集』には次の歌が見える。  
君がため浮沼の池の菱摘むと我が染めし袖濡れにけるかも

(巻七・二二四九、人麿)

その後「うきぬのあやめ」は、平安後期以降散見されるものの、勅撰集では中世の『続後撰集』(雑上・一〇五四・知家)まで用例を見ないが、俊成の「伊勢社」でも「菖蒲」題で詠んでい

ることから、少なくとも、阿仏は俊成歌も知っていたに違いない。

つづいて、『俊成五社百首』以外の俊成詠からの影響を少しく見てみたい。『安嘉五百首』を検すると、もとは俊成の詠であり、その後、新古今時代以降の歌人たちに享受された歌語を好んで用いる傾向のあることがわかる。次に四首を挙げてみよう。

⑨ ひまもなくしのは草のさのみやは秋なればとて露のかからん  
(安嘉五百首・新日吉・露・三五二)

ちらすなよしのは草のかりにても露かかるべき袖の上かは  
(新古今・恋二・一一一・俊成)

⑩ はかなしやながむる空の雲となり雨とふりてもとどまらぬよは  
(安嘉五百首・新日吉・無常・四〇四)

雲となり雨となりてや竜田姫秋の紅葉の色を染むらん  
(長秋詠藻・五五二・俊成)

⑪ かぎりなく思ふも久しふたばなる松のねのびのゆくすゑの春  
(安嘉五百首・鹿嶋・子日・四〇八)

行末を思ふも久し君が世はいはねの山の嶺のわか松  
(長秋詠藻・二九一・俊成)

⑫ 五月雨のやへ雲はれぬ谷かげは思ふ心もうちしめりつつ  
(安嘉五百首・えがら・五月雨・一三二五)

五月雨はたくもの煙うちしめりしはたれまさるすまのうら  
ら入  
(久安百首・夏・八二七・俊成)

これら四首の傍線部の歌語は、俊成詠の後、新古今時代に大いに享受されたと思しきものであり、阿仏は多く用いている。これが俊成の影響か新古今歌人たちの影響かはつきりしないが、少なくとも阿仏は、新古今歌人たちの歌ことばが、俊成の詠歌から発していたことは承知していたと思われる。いうまでもなく、俊成は為家の祖父であり、歌道家御子左家の実質的な始祖である。阿仏の『安嘉五百首』が倣うべき奉納百首として、また「堀河百首題百首」として、『俊成五社百首』が存在したというばかりでなく、やはり家の意識が俊成の歌にも関心を向けさせたともいってよいであろう。

一一

ここで、俊成と為家のあいだに位置する定家からの影響歌にふれておこう。定家は、『安嘉五百首』と同形式の奉納百首は詠んでいないが、いくつか関連がみられる。

⑬ とふとても人もこたへずおく山の岩ねの苔のふかきみの  
りは  
(安嘉五百首・新日吉・苔・三九〇)

おく山の岩ねの苔ぞあはれなるつひには人の衣とおもへ

『安嘉門院四条五百首』における「家の意識」について

ば  
(俊成五社百首・日吉・苔・四八五)

おく山の岩ねの苔の世とともに色もかはらぬなげきをぞ  
する  
(拾遺愚草・四八四・定家)

阿仏歌は、問うても誰も答えない奥山の深緑の苔を詠む歌である。ひっそりと動くことのない「おく山の岩ね」を介することとで、より一層の静寂をあらわそうとしている。俊成以前の「おく山の岩ねの苔」に近い先例としては、次の二首が挙げられるだろう。

おく山のいはほのこけのとしひさにみれどもあかぬきみに  
もあるかな  
(古今六帖・こけ・三九六一・家持集・一七四)

おく山のいはねが上のこけ蒔たちある雲の跡だにもなし

(堀河百首・苔・一三三九・基俊)

俊成以降、「おく山の岩ねの苔」と詠むものは、先に挙げた定家以外見当たらない。この両首のことばを取ったところに、俊成―定家と続く家につながる者としての意識がよみとれるのはなかるうか。

⑭ けふよりは波たちがへて夏衣かどりの浦もすずしかるらし  
(安嘉五百首・鹿嶋・更衣・四二七)

夏衣かどりの浦のうたたねに波のよるよるかよふ秋風

(拾遺愚草・一三三三・定家)



旅衣をりしもはなをたちかへてけふはかどりの浦にきに  
けり  
(雲葉集・旅早夏・二八一・為家)

阿仏歌は、今日(四月一日)よりは、波が立ちかへてかどりの浦も夏衣も涼しいことであろう、と詠んでいる。勿論「更衣」題であることから、第二句「波たちかへて」の部分には、「波立ちかへる」と「裁ちかへる夏衣」を掛け、第四句「かどりの浦」は「縑かどの裏」を掛けている。定家・為家・阿仏三首ともに「かどりの浦」を詠み、阿仏歌と定家歌は「波・夏衣」が、また為家歌とは「けふ……たちかへて」が共通していることから、関連性は十分考えられる。

「かとり」は、『新編国歌大観』で検索する限りでは、平安時代には先行例が見出せず、『万葉集』には、地名と思しき三例(含「香取娘子」卷十四・三四二七)がある。そのうち、「高島の香取の浦ゆ」(卷七・一一七二・作者未詳)は近江であろう。もう一首の「大船の香取(撤取)の海」(卷十一・二四三六)の歌については、『五代集歌枕』に「かどりのうみ 常陸 カトリの浦 在 下総国 一 敷」(十七「海」と出ている。阿仏は歌学書にも目を通してあるので、『五代集歌枕』の「常陸」の記述から常陸国の歌枕と解して鹿嶋社で詠んだのかも知れない。また、夏用の布としての「かとり」は、散文では「縑かどの御直衣」(『源

氏物語』「須磨巻」などがあり、「上流貴族はやつし姿の時以外は縑かどは着用しない」ものであるらしい。それゆえに王朝和歌には取り上げられない素材だったのでろう。いずれにせよ、『万葉集』出典の歌語から、定家のはじめて「夏衣かどりの浦」と詠み、為家・阿仏に詠みつがれていることは確かである。

⑮ 春雨も身のみふりそふ涙にてしくしく袖のぬれぬ日もしと  
春雨のしくしくふればいなむしろ庭にみだるる青柳のいと  
(安嘉五百首・今熊野・春雨・一七)  
拾遺愚草・八・定家

あづま屋のこやのかりねのかやむしろしくしくほさぬ春  
雨ぞふる  
(千五百番歌合・卷二・百二十二番右・定家)  
さほ姫のたつや霞のうす衣しくしくぬらす春雨ぞふる  
(新撰六帖題和歌・春雨・三八七・為家)

阿仏歌は、春雨のしきりに降っている様子を「しくしく」に込めている。「しきりに」とか「休みなく」と解される歌語「しくしく」は『万葉集』に二四例見え、そのうち、春雨に用いた一首を挙げてみよう。

春雨のしくしく降るに高田の山の桜はいかにかあるらむ  
(卷八・一四四〇・河辺東人)  
「しくしく」という歌語は、三代集時代には見出せず、『堀河

百首』「春雨」題（二七〇・藤原顕仲）に登場した後も用例は決して多くはない。しかし定家には右の二首があり、また、為家も阿仏と同じく「春雨」題で詠んでいることから、ここにも強いつながりが感じられるだろう。

⑩ 霞こそ野にも山にもかかりけれ春の衣のたもとゆたかに

（安嘉五百首・新賀茂・詞・二〇九）

春のきるたもとゆたかにたつ霞めぐみあまねきよもの山のは

（拾遺愚草・詞・二〇九〇・定家）

阿仏歌は、野にも山にも霞がたなびいているさまを、それこそ「春」が霞の衣をゆったりと掛けているようだ、と詠んでいる。「こそけれ」の係り結びを用いて、霞こそが「春」の着る衣なのだという思いを強く出した一首である。結句「たもとゆたかに」は、「唐衣たもとゆたかに」（古今・雑上・八六五・よみ人しらず）と詠む先例もあるが、霞の衣を「たもとゆたかに」と詠んだものは定家が初めてであろう。⑩阿仏歌の下旬は定家歌の上一句とほぼ一致しており、同題であることと合わせて、定家に学んだものと思われる。しかしながら、次にあげる歌は、『安嘉五百首』より十数年早い成立で、同じ「霞」題であることから、こちらよりの影響も考慮に入れなければならないかも知れない。

染めわたす野にも山にもさほ姫の袂ゆたかにたつ霞かな

（東撰和歌六帖・詞・二四・法印良全）

⑪ その他、定家からの影響歌として次の四首を指摘しておきたい。  
春深き色こそまされ谷川の波のかざしの山ぶきの花

（安嘉五百首・鹿嶋・秋冬・四二五）

おくあみの霞をむすぶ春風に波のかざしの花ぞさきそふ

（拾遺愚草・二〇九三・定家）

⑫ 冬山のふもとのをさざことさらに霞まちとる音のさやけさ

（安嘉五百首・今熊野・霞・六五）

ふりしきし木の葉の庭にいつなれて霞まちとる音をつくすらん

（拾遺愚草・二〇四・定家）

⑬ いとさむしみ山の里は春とだにまだ白雪の松にかかりて

（安嘉五百首・えがら・残雪・一一二）

春とだにまだ白雪の深ければ山路とひくる人ぞまれなる

（拾遺愚草員外・六〇九・定家）

⑭ 秋ふかき露に時雨をこきませてそむる紅葉の色やいくしほ

（安嘉五百首・鹿嶋・紅葉・四六〇）

音まがふ木のは時雨をこきませていはせにそむる清滝のなみ

（建保内裏名所百首・清滝河・六〇三・定家）

⑮ 歌の「波のかざし」は、為家も「梓弓はる立ちぬらしわた

つ海の波のかざしに霞たな引く」(洞院摂政家百首・春・三三)と詠んでいるが、意外に例がなく、他には見られないものである。

⑱歌の「蔽まちとる」、⑲歌の「春とだにまだ白雪の」も同様に定家と阿仏以外は見出せない。

なお、「春とだに」は、阿仏歌以前には次の三首のみである。

鶯のしのぶひかずもゆきふればまだ春とだにしらずぞあり  
ける (定頼集・二五四)

春とだにきえあへぬのべのゆきまよりわがをりがほにもゆ  
るさわらび (為家千首・八六)

ながらへていければのちの春とだに契らぬさきに花のちり  
ぬる (現存和歌六帖・四三七・井内侍)

⑳歌の「時雨をこきませて」とつづけるのも、定家・阿仏以外には見られない。このように㉑から㉓歌の傍線部の語句は定家以外にはほとんど詠まれていないといえるものばかりである。

阿仏は、定家独自の歌語であることを承知の上で、自歌に用いているように思われる。定家は、新古今歌風の確立に大きな役割を果たした歌壇の重鎮である。詠まれた歌はあらゆる方面から注目度も高い。その中で阿仏は、定家流として名高い歌風の側面だけではない、あまり知られていない定家の修辞をも学

ぼうとしたのではなからうかと思われる。

## 三

ここからは、為家詠の影響を見てみたい。『安嘉五百首』には、為家とのみの特異表現や、特徴のあることばつづきを取り入れて作歌した例が多数見られる。先ず『為家七社百首』から、為家・阿仏二人だけの特別な語句を用いている例を挙げてみよう。

⑲ 色かはるあさちおしなみ吹く風に夕霜さやぐ冬の山もと

(安嘉五百首・新賀茂・霜・二六四)  
風さゆる神垣山のささのはに夕霜さやぎかくる白ゆふ

(為家七社百首・石清水・霜・四〇一)  
阿仏歌は、色変わりしたあさちの原に葉を押し靡かせて強い風が吹いた後、夕霜がおりてさやさやと音がする山の麓であるよ、と詠んでいる。「あさち」「夕霜」を詠み入れることで、季節の推移を表そうとした一首である。㉑阿仏歌の上句は、『源氏物語』の「風吹けばまづぞみだる色かはるあさちが露にかか

るささがに」(實木卷・二五一・紫上)に拠ったと思われる、次の俊成卿女の歌が近いだろう。

色かはるあさちがすまにふく風の音にもしるき秋のくれか  
な (千五百番歌合・秋四・八百二十三番右)

しかし、阿仏歌第四句「夕霜さやぐ」が、為家歌のほかには例が見出せない特異表現であることは見過ごせない。阿仏は意識的に為家歌の珍しい語句を取り入れて、自歌に生かそうとしているのではないかと考えられる。

㉔ なげくぞよよそにこがるる漁り火の釣りにともせる影ばかりみて  
(安嘉五百首・えがら・不逢恋・一七九)

なげくぞよよ水にとづるにこりえのうちとけがたき世にす  
まふとて  
(為家七社百首・石清水・水・四三六)

阿仏歌は、舟人が釣りをするために灯している漁り火が遠くに見えるように、遠くからその人の影ばかり見て恋しく思っている、初句に「なげくぞよ」を置くことによつて、恋の苦しみを強調する歌である。初句「なげくぞよ」の例は、右の二首以外には為家詠にもう一首、「なげくぞよ鏡のかげのあさ」とに(統古今・雑下・一八一九)があるのみで、為家・阿仏独特の表現と言つてよいのではなからうか。

㉕ 阿仏歌の本歌と目されるのは、わずかだけでも愛する人に逢う手立てがあればよいのだが、と詠む次の『拾遺集』の歌(万葉・卷十二・三二七七・作者未詳歌の異伝歌)である。

志賀の海人の釣りにともせる漁り火のほのかに妹を見るよ  
しもがな(恋二・七五二・よみ人しらず、恋五・九六八に重出)

『安嘉門院四条五百首』における「家の意識」について

阿仏の扱った『堀河百首』の歌題「不逢恋」は、見初めてはいるが、まだ親しくなっていない段階、逢えない苦悩を詠むのが一首の本意である。この「不逢恋」題の阿仏歌の「よそにこがるる……影ばかりみて」は、遠くの舟を漕ぐ様子に掛けて、いとしい人の姿を遠くから追い求める表現であり、古歌を踏まえて題意をあらわそうとした工夫が見られるだろう。その上で効果的に為家との特異句を初句に置いていることになる。

㉖ 都よりそどもの山にみしものをむかひの岡も賀茂のみづが  
き  
(安嘉五百首・新賀茂・山・二九二)

なほ寒き春の日かげもしられけりそどもの山の峯の白雪  
(為家七社百首・北野・残雪・四二二)

はれまなきそどもの山の五月雨にふる日かさなる峰のあ  
ま雲  
(夫木抄・三〇三四・為家)

「そども(外面・背面)」は、『万葉集』に見える歌語「耳梨の青菅山は背面の」(卷一・五二)で、『能因歌枕』(廣本)には、「そどもとは、うしろの庭を云。家のほかをも」と出ており、例歌も「ぬしなくてあれたる宿のそどもには月の光ぞひとりすみける」(能因法師集・二二八)などがある。しかし、用例が多くなるのは、『堀河百首』の「蚊遣火」題などで詠まれてからである。しづのをの外面にたつる蚊遣火の下にこがれてよをや過さ

ん (四九五・紀伊)

山がつの外面にたつるかやり火の下にくゆりてやみぬべき  
かな (四九六・河内)

これ以後は例歌も多く、たとえば『新古今集』に、「我がやどの  
そとにもたてるならの葉のしげみにせずむ夏はきにけり」(夏・  
二五〇・惠慶法師)が入集し、歌学書にも注目されている。鎌倉  
時代には、「そとも」は珍しい歌語ではなくなっているが、「そ  
ともの山」は為家が右の二首を詠んでいる以外は見出せない。  
為家の『夫木抄』所載歌の詞書には、作歌年が「文永四年(一  
二六七)」とある。この時期は阿仏が為家と、嵯峨野で一緒に暮  
らしていたとされており、「そともの山」は、為家と一緒に見た  
思い出深い山なのであろうかと想像される。

次いで、歌語としては特異なものではないが、為家・阿仏二  
人だけのことはつづきや新しい表現法などを用いる例がある。

②④ 氷室山むすぶ氷もおのづからのりの水にぞおもひとくらん

(安嘉五百首・新日吉・氷室・三三九)

氷とはたが偽りぞ氷室山おもひとくには水となりつつ

(為家七社百首・北野・氷室・三三二)

阿仏歌は、氷室山を擬人化して詠み、氷が「溶ける」に、迷  
いが「解ける」を掛けて、おのづから悟って水になるのだと詠

んでいる。『千載集』釈教歌の「おもひとく心ひとつになりぬ  
れば氷も水もへだてざりけり」(二二三七・式内親王家中将を  
脳裏におきながら、為家詠の氷室山をも意識した新しい表現法  
だといってよいだろう。「氷室」題は、正月元日の節会の「氷様」  
や、夏に朝廷に献上された故事をふまえ、皇室の繁栄を詠んだ  
り、夏の涼しさを詠むものがほとんどである。しかし、為家・  
阿仏の二首は、仏教の悟りの心を取り入れて作歌している珍し  
い用例である。これも阿仏が為家を踏襲した一例と見てよい。

②⑤ ふりかさね嶺もひとつに谷かげのいほりをうづむ冬の白雪

(安嘉五百首・今熊野・雪・六六)

いかばかりふりかさねらん名にたてて津守の浦の冬の白  
雪 (為家七社百首・住吉・雪・四一九)

阿仏歌初句「ふりかさね」には、峰が重なると雪が降り重な  
るを掛けている。連なる峰も谷かげの庵も雪にすつかりうづも  
れてしまい、白雪だけの景になってしまった、と詠んでいる。

一方、為家歌は、住吉社への奉納歌であり、「ふりかさね」は、  
住吉三神以来の住吉社の歴史を振り返った「古り」と雪の「降  
り」を掛けたものである。雪は「ふりつもる」と詠まれるこ  
とが多く、「ふりかさね」と詠むのは源俊頼の詠「難波瀉あしま  
の氷けぬがうへに雪ふりかさねおもしろの身や」(散木・雑上・

一五〇〇)が早くに見え、その後、同歌が『新勅撰集』(雑二・一八九)に入集した後の鎌倉期には頻用されている。為家も盛んに使っている語句である(洞院百首・一三五、為家集・九〇〇・九〇五など)。結句「冬の白雪」も為家が他の場で多く詠んでおり(為家千首・五五一、宝治百首・二二二七、中院集・一〇四、為家集・九二二)、為家の数ある常套句の一つでもある。㉔阿仏歌の初句「ふりかさね」は、従来通りの「ふりつもる」でも差しつかえはなかったであろうが、あえて為家と同じ表現を用いているのではなからうか。このように為家がよく使う歌語を一首のなかに重複して詠み入れるのが阿仏の詠歌態度ともいえる。

㉕ あらはさぬ思ひをつつむ衣手や涙みだるる忍ぶもぢずり

(安嘉五百首・今熊野・忍恋・七八)

ぬれぬとも色になみえそわが袖に涙みだるる忍ぶもぢずり  
(為家七社百首・日吉・忍恋・五〇二)

忍ぶ思ひの苦しさを涙で衣が濡れるのを、その衣の模様のようになおも心が乱れる、と詠んでいる。それぞれの第二句の「思ひをつつむ」「色になみえそ」や、第三句の「衣手」「袖」も同様の意であり、一首の大部分が同じ表現である。「忍ぶもぢずり」は、『古今集』(恋四・七二四・河原左大臣 以来「みだれ」と詠み合わせられる。しかし、紋様のみだれと心のみだれを重ね

て、「涙みだるる忍ぶもぢずり」とつづけるのは他に見えない、二人だけの特別な表現であろう。

その他にも、『安嘉五百首』には、『為家七社百首』と同題で同趣という類似表現は数多く見られる。いまは三首を挙げておくにとどめておこう。

㉖ 紫のくだくるほどにふぢばかま野風やあらく吹きしをら

(安嘉五百首・新日吉・蘭・三四八)

吹きしをる嵐にくだく紫の色むつまじきふぢばかまかな

(為家七社百首・住吉・欄栴・二九三)

㉗ めぐりあふ命のほどのあやふきは同じよながら遠きわかれ

(安嘉五百首・新日吉・別・三九九)

さらぬまつ命のほどとたのみしをいかに別れし春の夕暮

(為家七社百首・伊勢・別・六三八)

㉘ 逢坂にむかふる駒もけふこえは秋のなかばや杉のした道

(安嘉五百首・新賀茂・駒迎・二五五)

昔より秋のなかばに逢坂の関にむかふるもち月の駒

(為家七社百首・春日・駒迎・三四〇)

#### 四

次に、『為家集』からの影響歌を挙げてみたい。ここでも、為

家・阿仏二人だけに共通する表現を多く用いている傾向が見られる。

③⑩ わが袖にぬれはまさらじ露わけて朝立ちしけるかりの衣も

(安嘉五百首・新賀茂・鷹狩・二七三)

よひの雨のなごりの霧の朝立ちに我がかり衣しほれてぞ

行く (為家集・旅霧・一三二〇)

阿仏歌は、露を分けて朝立ちして行つた狩衣がどんなに濡れ

ようとも、私の袖が涙に濡れるのには勝りますまいよ、の意で

あることを想像させるような叙情的な詠みである。対して為家

歌は、宵の雨のなごりの霧に濡れそぼりながら朝立ちするわが

狩衣であるよ、とこれは旅立ちの歌である。この二首はまるで

贈答歌のような構成になっている。なお、両首の「狩衣」と「朝

立ち」との取り合わせは、他に例を見ない特殊なものである。

③⑪ 夜もすがらみ山のをささ吹く風におちくるすゑに霞ふるな

り (安嘉五百首・新賀茂・霞・二六五)

さゆる夜はみ山のをささそよさらに思ひやられて霞ふる

なり (為家集・霞・八九二)

阿仏歌は、夜通し吹いた風に笹の葉が舞い落ちてしまった、

どうやら霞がふつているようだ、と風の音だけで外の気配を感

じている。為家歌も、寒い夜はみ山のをささがことさらに思いやられると詠んでいる。二首ともに「夜・をささ・霞」と一連の冬の歌語を列挙して、意識的に構成を同じくする詠み方である。また「霞ふるなり」を詠んだ例は他にも見出せるが、「み山のをささ」と両方を有する歌は確認できない。

③⑫ 庵むすぶ外山のすそにひまもなく時雨れてかかる冬のむら

雲 (安嘉五百首・鹿嶋・時雨・四六三)

ちりはてし外山のまさき吹く風に霞さきたつ冬のむら雲

(為家集・霞隨風・一九四四)

山すその庵に、やむことなく時雨が降り、むら雲がかかる典

型的な冬の情景を詠んでいる。為家歌が、『古今集』の「み山に

は霞ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり」(神遊びの

歌・一〇七七・よみ人しらず)を踏まえて、「霞さきたつ」と詠ん

だものを、阿仏歌は霞の前に降る「時雨」と言いかえたところ

に一首の趣向がある。なお、これらの歌に近い例として、定家

詠「外山より村雲なびきふく風に霞よこぎる冬の夕暮」(老若五

十首歌合・冬・百六十八番左)があり、この歌も参考にしたかも知

れない。しかし③⑫歌の結句「冬のむら雲」は他では見かけない

為家・阿仏二人だけの歌語である。

③⑬ 忘るるもわれからあゐのそめ衣いかにかさねて恨みかけま

し

(安嘉五百首・鹿嶋・恨・四八六)

身にふるる契りもかなしき夜衣いかにかさねて物をおも

はん

(為家集・一六〇七)

阿仏歌は、私自身忘れ去ることができたとしても、それでも、

どのようにして恨みのことばを申し上げましょうか(いや出来な  
い)、と感情を込めた歌となっている。為家歌の「契りもかなし  
き夜衣」に対して「われからあみのそめ衣」と詠み、「われから」  
を響かせている珍しい詠み方である。なお傍線部の「いかにか  
さねて」は、為家・阿仏のみの特異句である。

第二句の「からある」は、『万葉集』に「我がやどに韓藍蒔き  
生ほし」(巻三・三八四・赤心)と見え、鶏頭の花の古名である。

その花汁を染料にした藍衣の歌は『古今六帖』に次の歌が見え  
る。

からあみのやしほの衣朝な朝ななるとはきけどまつめづら  
しみ (ころも・三二六五・よみ人知らず)

これは「くれなるのやしほの衣朝な朝ななれはすれどもいやめ  
づらしも」(万葉・巻十一・二六二三・作者未詳)の異伝歌である。

この「くれなるのやしほの衣」は、「へにばな」を染料にして、  
幾度も重ねて染めた衣のことである。『古今六帖』で詠まれた

「からあみのやしほの衣」は藍染であろうと思われるが、この後

に「からある」が見出されるのは、鎌倉初期の『六百番歌合』  
「寄衣恋」題の歌である。

からあみのやしほの衣色ふかくなどあながちにづらき心ぞ

(二十四番左勝・一二七・季経)

この歌について、判詞には次のように見える。

右云、からあみのやしほといふもじ、くれなるのことにや、  
然れば、かちにはいかが、陳云、たしかにくれなるのみえた  
る事なし、からあみのふかき色なれば、かちといはん、  
…(中略)

判云、左、初にからあみとおける、倭にしも聞えざれど、  
くれなるにはあるべからず、かちといへらん、不可及難敷、

…(後略)

右方から、初句の「からある」は紅ではないのか、「かち(襦)」  
にはいかがか、と問われて、左方は、確かに紅とわかる例はな  
い、「からあみのふかき色」だと反論している。判者も、「くれ  
なるにはあるべからず」と判を下している。この判者は俊成で  
ある。『六百番歌合』までの「からあみのやしほの衣」は、紅で  
はないのかとの認識もあったが、俊成判の後には、藍色の衣であ  
ると定着したようである。この後は、同様の解釈の詠歌もあ  
り、たとえば、次の『光明峰寺撰政家歌合』の詠での定家判



には、「右、優にをかき由」として勝としている例が見られる。

からあめのやしほの衣ふかけれどあらぬ涙の色ぞまがはぬ

(寄衣恋・十一番右勝・二二・知家)

さらに、為家にも似た歌がある

からあめのやしほの衣ふりぬとも染めし心の色はかはらじ

(為家千首・六二二)

③③ 阿仏歌の「からあめのそめ衣」は、この為家歌からの影響もあるだろうが、俊成・定家の歌合の判詞にも留意した上で、作歌している姿勢が窺えるのではなからうか。

最後に、和歌の隆盛を願う歌を見てみよう。

③④ 冬とても猶よもかれじあし原やなかつ国なるよよの言の葉

(安嘉五百首・新賀茂・寒蘆・二六七)

世世かけて思へばとほしあし原やなかつ国よりならふ言  
の葉

(新撰六帖題和歌・ことのは・一七九二・為家)

阿仏歌は、上句では、冬だといつても、なお「よ」(蘆の節)も枯れない蘆原であるよと詠み、下句では、世の中の言の葉(和歌)がいつまでもすたれないでいることを願っている。「あし原やなかつ国」は、『新古今集』「仮名序」の冒頭部分にうたわれた、「やまとうたは、昔あめつち開けはじめて、人のしわざいま

だ定まらざりし時、葦原中国の言の葉として」に拠っているだろう。これは『日本書紀』に記述のある古代日本国のことである。「あし原やなかつ国」は、管見の及ぶ範囲では、和歌においては為家以前には詠まれていない。為家は古い言葉である「なかつ国」を初めて和歌に取り入れたことになる。阿仏は、為家以外には誰も詠んでいない歌語である「あし原やなかつ国」に注目して、為家歌の「ことのは」題とは歌題は違うが、あえて自身の「寒蘆」題に取り入れたのではないだろうか。また、為家と同様の歌語を使うことによって、和歌の永遠なることを願う気持ちが表示されている。

この歌に関連して次の一首を見てみよう。

③⑤ さかふべき君がよまもる神にこそ祈りそへつれ敷島のみち

(安嘉五百首・鹿嶋・祝・五〇六)

歌の内容は、栄えますように、天皇の御代をまもる神に祈り添えてほしいものである、わが和歌の(家の)道を、との意であろう。この歌は『安嘉五百首』の五つの奉納社の最後にあたる「鹿嶋社」詠で、かつ百首歌の最後の「祝」の歌である。また鹿嶋社は藤原氏と深くつながる神社でもある。『安嘉五百首』は、もとは千首あったもので、現存伝本は、後半の五百首だといわれている<sup>13</sup>。その最終の歌の結句に「敷島のみち」を置いて

いることになる。「敷島のみち」は、勅撰集の序「敷島の道も盛りに興りて」(『千載集』)と見え、天皇の御製には詠まれるが、一般の和歌には数少なく、勅撰集では『新後撰集』(神祇・七四二・津守国助)まで見られない歌語である。そのように重要な歌語を千首の最後の歌に詠み入れたところに、意味があるのではなからうか。㊦歌には、和歌の隆盛を祈る強い期待が込められており、『安嘉五百首』の目指すところが何であるかを、端的に物語るものと思われるのである。

## おわりに

『安嘉五百首』について、俊成・定家・為家に絞って、影響を受けたと思しき例を煩雑を厭わず掲げてみた。俊成からは、後の新古今時代の歌人たちに受容・享受されることになる歌語や表現を多く摂取している。また、俊成に発して定家や為家が詠んだものを、阿仏が踏襲している例もある。定家からは、先行する同形式の奉納百首はないけれど、俊成―定家しか詠んでいないものや、万葉以来初めて定家―為家と詠み継がれた珍しい歌語を詠む例もある。さらに、他ではあまり注目されていない定家独自の表現を自歌に取り入れた例もある。

為家との結びつきは堅固である。二人だけの共通語句、共通

『安嘉門院四条五百首』における「家の意識」について

表現を用いているものも多く、為家の常套句を一首の中に重複して詠歌したり、為家以前には詠まれたことのない歌語を初句に生かしている例もある。つまり、為家の歌ことばを自歌に取り込むことにより、歌道の家を存続させようとする為家の意志をも百首歌の中に込めようとしたのではなからうか。

阿仏は、このようにして、勝訴祈願とともに、歌道の家の発展を念じた奉納百首を完成させたのである。『安嘉五百首』の詠歌は、俊成・定家・為家と続く「歌の家」の意識に支えられた営為であり、歌人阿仏の果たした役割は大きいものがあると確認される。念願の所領譲渡は、阿仏没後、およそ三〇年後の正和二年(一一三三)七月廿日「播磨國細河莊地頭職関東裁許狀」が示す通り、「然則、於當莊地頭職者、任文永兩通讓狀并正應二年下知狀、所被付前右衛門督家也」<sup>5)</sup>との判決があり、冷泉家の祖為相が相続すると安堵されている。家の存亡をかけて鎌倉に向かった阿仏の悲願はこれによって達成されたことになる。

## 【注】

引用した和歌は『新編国歌大観』による。ただし、表記については漢字を宛てたり、送り仮名を補うなど、適宜改めた箇所がある。『万葉集』は旧国歌大観番号を用い、表記は小学館『新編日本古典文学全集』を参照した。歌学書は風間書房『日本歌学大系』による。

- (1) 『安嘉門院四条五百首』は、島原図書館松平文庫蔵本が昭和三十六年に発見され、中村幸彦・今井源衛・島津忠夫氏により『文学』二九卷一―号(一九六一年一月)に報告された。
- (2) 訴訟については、福田秀一「細川庄をめぐる二条冷泉兩家の訴訟」(『中世和歌史の研究』(角川書店・一九七二年)所収)、佐藤恒雄「藤原為家の所領譲与について」(中四国中世文学研究会編『中世文学研究―論攷と資料―』(和泉書院・一九九五年)、のち『藤原為家研究』(笠間書院・二〇〇八年)終章第二節に「為家の所領譲与」として収録)などによる。
- (3) 三伝本については先行研究がなされている。仮にA・B・Cとする。A島原図書館松平文庫蔵本(寛文〳文禄期写)(中原勇夫・島津忠夫校訂『中世和歌集』(西日本国語国文学会翻刻双書刊行会・一九六三年)所収)、B葉師寺蔵本(明和六年(一七六九)写)は稲田利徳「いま一本の『阿仏尼詠五百首』の伝本について―(付)葉師寺蔵歌書類管見ノート―」(『和歌史研究会会報』三一・三二合併号・一九六八年一月)により紹介、C冷泉家時雨亭文庫蔵本(室町中期写)は冷泉家時雨亭叢書31『中世私家集七』(朝日新聞社・二〇〇三年)に紹介。
- (4) A・Bの校異については、築瀬一雄「校註阿佛尼全集 増補版」(風間書房・一九八一年、初版発行は一九五八年)があり、Cの校異については、森井信子『安嘉門院四条五百首』の諸伝本―附十社百首拾遺―(『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』三二号・二〇〇六年二月)が「……本文異同は五一箇所存する。時雨亭本に独自異文はなく、必ず松平本または葉師寺本に一致している……」と述べている。
- (5) 五社のうち「新賀茂の社の百首」「新日吉の社の百首」には序文がない。
- (6) 伊井春樹『十七番詩歌合』について(『詞林』十九号(大阪大学古代中世文学研究会・一九九六年四月))。同歌合の開催時期については、井上宗雄「和歌史研究について―新資料若干の紹介を兼ねて―」(『國學院雑誌』第九五卷十二号・一九九四年二月)で言及されている。
- (7) 前掲(4)築瀬一雄氏。
- (8) 松野陽一「五社百首考」(『立正女子大学短期大学部研究紀要』一三号・一九六九年二月)。
- (9) 佐藤恒雄「藤原為家『七社百首』考」(『國語国文』三九卷八号・一九七〇年八月、のちに『藤原為家研究』(笠間書院・二〇〇八年)第二章第五節に「七社百首考」として収む)および『藤原為家全歌集』(風間書房・二〇〇二年)なお伝本は孤本で、『新編国歌大観』には『為家五社』と表題されるが、内容は七百首であることから、『為家七社百首』で統一する。
- (10) たとえば、勅撰集入集歌数を較べてみると、『俊成五社百首』からは五二首、『為家七社百首』からは六首、『安嘉五百首』からは三首(秋・二四四、後朝恋・二八八、閑・九五が、それぞれ『風雅集』四七七・一一三・一八九四に入集している)というように、歌数に差があり、後世における評価の一つの基準でもあるだろう。
- (11) 竹下豊「堀河院御時百首の研究」(風間書房・二〇〇四年)第四章第二節「源俊頼」より、「うづら鳴くまもの入江の浜風に尾花なみよる秋のゆふぐれ」歌の項による。
- (12) 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校註『源氏物語二』(新日本古典文学大系20(岩波書店・一九九四年))「須磨巻」脚注による。
- (13) 水川喜夫『飛鳥井雅有日記全釈』(風間書房・一九八五年)所

収『嗟峨のかよひ』の「文永六年長月」の項に「女あるじ」とある。

- (14) 島津忠夫『安嘉門院四条五百首』と『十六夜日記』(『国語国文』三一巻一号・一九六二年一月、のち『和歌史下』(島津忠夫著作集8・和泉書院・二〇〇五年)に同論文名で収載)に「……総歌数は五〇六首あり、実は十社に奉納した千首のうちの後半部分であることが知られる……」とある。

- (15) この鎌倉幕府の裁許状は天理図書館の所蔵文書で、呉文炳『国書遺芳』(一九六五年)および天理図書館善本叢書68『古文書集』(天理大学出版部・一九八六年)に影印公刊されている。

※本稿は平成二〇年三月に大阪府立大学に提出した修士論文の一部を書き直したものである。

(さよなき さよこ)・本学大学院博士前期課程修了)